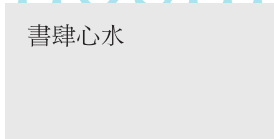


玄洋社社史

玄洋社社史編纂会

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水



玄
洋
社
社
史

目

次

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

緒言 15

監修の辞 16

この理由の下に社史を編めり 18

凡例 20

五箇条の御誓文 21

第一篇

第1章 玄洋社 24

第2章 その郷土と外交関係 26

一 上古の対外関係 27
中世以降の対外関係 31

第3章 明治初年の日韓関係 34

第4章 征韓論 46

第5章 内治党の対韓策 58

第二篇

第6章 新政府に対する反感と征韓論の影響 66

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

――	対外派の二分流と福岡志士	68
――	岩倉暗撃	70
――	佐賀の乱／江藤の福岡党誤解	81
第7章	福岡志士の活動	85

――	矯志、強忍、堅志社成る	85
――	神風党、秋月の乱、萩の乱	87
――	萩の応援	88
――	学舎成る	91
――	十一	

第8章	薩南の風雲	92
-----	-------	----

第9章	福岡の変	96
-----	------	----

――	軍略定まる	96
――	福岡城の襲撃	98
――	退却、逆襲、後進	99
――	秋月に拠る	100
――	越智、	
――	武部捕わる	101
――	意気千古不滅	102
――	勤王婆さん	106
――	殉難志士	107

第10章	福岡志士と高場乱	109
------	----------	-----

――	福岡の勤王党	109
――	脈絡相伝う勤王の血	112
――	酒可用不可酔	113
――	県令の首と俱に捧	
――	げよ	115

第三篇

第11章	民権論の創説	120
------	--------	-----

――	大阪会議	120
----	------	-----

第12章	志士の出獄 民権論の唱道	130
------	--------------	-----

――	開墾社の設立	130
――	大久保暗殺	131
――	板垣と頭山の会見	145
――	向陽義塾の設立	146

第13章	国会開設請願	149
	——愛国社再興／向陽社員の活動／筑前公衆会の請願	149
第14章	政社の勃興	151
	——民論の圧迫／社員の上京	151
第15章	玄洋社生まる	155
	——憲則三章	155
第16章	玄洋社徐々外に對す	158
	——箱田社長に任ず	158
	——憂国の鉄腸溶く	169
	——十五年朝鮮の変	159
	——志貴山事件	171
	——十七年朝鮮の変	165
	——玄洋社と亡命客	167
第17章	条約改正問題	172
	——外交顛末	172
第18章	井上案改正条約	180
	——保案条例	183
第19章	大隈案の条約改正	192
第20章	改正案と国民の熱憤	199
	——言論戦	199
	——官民の反対	210
第21章	改正案と玄洋社	220

第22章 来島の決心 228

一 風蕭々易水寒 228 爆弾の準備 232

第23章 十月十八日の閣議 234

第24章 ああ、霞ヶ関 238

一 爆声起る 238 大隈遭難録 240 玄洋社員の拘引 253 改正案ついに敗る 256

第四篇

第25章 玄洋社の国権主義 260

一 帝国議会開設 260 何故の国権論 264 議会の衝突 266

第26章 選挙干渉 268

一 政府の対選挙策 268 ああ流血の悲惨事 270 暴力の後 272

第27章 天佑俠 276

—— 活動平岡に移る 276 金玉均の横死 277 的野の奔走 279 天佑俠成る 281 東学党と

合す 290

第28章 日清戦争 298

天佑俠の活動 298 京軍和を講う 309 活動いよいよ起る 311 皇軍連勝 313 袁の面

皮剥る 320
その後の天佑俠 322
三崎山 323

第29章 憲政党と平岡 327

一 憲政党成る 327
政党内閣の出現 329
限板ついに乖離す 332

第30章 日露の危機迫る 336

一 隠忍四十年 336
日韓露の関係 338
国民同盟会と対外同志会 342

第31章 日露交戦 348

一 屈辱初めて報う 348
内田の献策 353
満洲義軍 355

第32章 日韓併合 357

第33章 支那革命と玄洋社 360

一 革命軍蜂起す 361
頭山と犬養の渡清 371

第34章 玄洋社の現在と将来 375

第五篇

第35章 玄洋社員の面影 384

—— 筑前人物系統 384
玄洋社の三傑 386
箱田六輔 387
平岡浩太郎 390
頭山満と杉山 415
茂丸 396
現社長進藤喜平太 407
香月恕経 409
奈良原到 414
来島恒喜 415

第36章 剣光余談

429

武部小四郎

429

越智彦四郎

431

内田良五郎と大野卯太郎

432

宮川太一郎と松浦

愚 436

久光忍太郎と江上述直

437

舌間慎吾

438

村上彦十

439

久世芳麿

439

加

藤堅武 440

大畠太七郎

441

八木和一

441

川越庸太郎

442

吉田震太郎

439

川越余

代 442

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

復刻版凡例

- 一、本書は一九一七年刊行『玄洋社社史』（玄洋社社史編纂会編輯発行）の新活字による復刻版である。
- 一、各章節末に附記された詩歌引用や関連資料引用の類で掲載を省いたものがある。また改行を省いたところもある。巻末附録の歴代内閣一覧と一般的な政治史年譜も省いた。
- 一、漢字は新字体を使用した。
- 一、現代仮名遣いを使用した。
- 一、平仮名表記を多用した。同じ語でも語の続き具合や品詞の別により平仮名表記か漢字表記か読みやすいほうを選んで使い分けた。
- 一、合略仮名は平仮名に置き換えた。
- 一、踊り字は「々」のみを使用した。
- 一、句読点を加減按排した。
- 一、送り仮名を加減按排した。
- 一、濁点を補ったところがある。
- 一、「」括りの説明は本書刊行書が補った。
- 一、過剰に使用されている傍点を基本的にすべて削除した。
- 一、小活字で組まれている範囲を「」を付して区別した場合がある。
- 一、罫字等の敬礼書式は基本的に省いた。
- 一、正誤を判断しかねる記述等には「ママ」とルビ書きした。

玄
洋
社
社
史

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

緒言

福島県人中野天門、福岡県人葦津耕次郎両氏は、つとに朝鮮支那大陸に遊び、国事に奔走する所あり、共に憂世慷慨、節を尚ぶの士なり。

両氏深く国民の対外的元氣萎靡せるを憂えかつ慨すること久し。すなわち前に玄洋社が滿韓南清の野に活躍せるを想起し、広くその事跡を天下に伝うるあらば、以て国民の元氣振作に資する所すくなからざるべきを論ず。

宮崎県人菊池秋四郎氏福岡に滞留年あり、深く玄洋社員と親交を結びその史を審し、かつ史蹟の湮滅せんことを憂え、閑を得てこれを編述せんことを期す。たまたま葦津氏の知友福岡県人幡掛正木氏玄洋社史編纂に志あり。

ここにおいて幡掛氏同志と計りて、玄洋社々史編纂会を起す。すなわち中野、葦津両氏の後援を得、玄洋社員にして前代議士たりしの野半介、大原義剛および国民党幹事美和作次郎三氏の監修の下に菊池氏もつばらその編纂の任に当たり、ついに玄洋社々史一卷を上梓するに至れり。記する所は玄洋社の対外的奮闘を緯とし、その国家的活躍を経とせり。

もしそれこの計史一卷の汎布に因って、国民元氣振策の一端に資し、対外的觀念鼓舞の一助たるを得ば、あに独り本会の光栄のみならんや。

大正六年春三月

玄洋社々史編纂会

監修の辞

寡頭政治もとより不可なり、藩閥専制また排せざるべからず。明治維新におよび百制これかわるといへども、上に藩閥蕃居して聖明を蔽い、また民論を塞ぐ。下これを喜ばずして、鬱勃の不平あり、同郷の志士先輩、憂国慨世、ついに政治結社を起し民権伸張に努む。その西南に風雲起るや、直に剣を提げて起つ所以のもの、一に君側の奸をしりぞけて、聖明の昭々を顕彰せんとするにあるのみ。しかもついに一敗地にまみれ、志士多くこれにほろぶ。

玄洋社は実にこれら西南呼応の残党によりて形成せられたる団結なり。その国事に奔走するもの、先人の遺志を継げるのみ。外大陸に対して国威の発揚に努むるもの、また先人の遺志を継承せるに外ならざるなり。予らもとより玄洋社に籍を有する者、自画自賛の厚顔をあえてなさずといへども、玄洋社員が、その憲章の定むる所に則り、或いは南船北馬、或いは東争西戦する所以は、一に君恩に報い、国家に尽さんとする至誠に出づるにあらずして何ぞや。それしかり。しかりといへども、我が玄洋社未だかつてその記録を編むなし。たまたま菊池、幡掛両君、予らの僑居を歴訪し、告ぐるに玄洋社々史編纂会設立の事を以てし、かつ社史編纂の監修を乞わる。すなわちこれを諾し随って稿成れば、随ってこれを監修す。しかれども時たまたま第三十八議会解散後の総選挙に当たり、予らまた選挙場裏に往来出入、奔走転戦寧日なし。わずかに動中少閑をぬすんでこれを閱す。もとより一の遺漏なきを保し難し。すなわち監修の辞を撰する所以のものは切に読者の諒察を乞わんとするにあるのみ。

大正六年三月

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

監
修
者

前 代 議 士	前 代 議 士
的 野	大 原
半 助	義 剛
	美 和 作 次 郎

監
修
の
辞

この理由の下に社史を編めり

吾人は到底死を免るべからず。しかれども国家は地球の存在と共に永遠に存続す。吾人の短生涯は以て国家の悠久と終始する能わず。しかも吾人は吾人の短生涯においてその一身を国家に捧げ、その全力を傾倒して国家に尽さんと欲す。

しかれども吾人の一身と全力は国家より見て甚だ微少ならずんばあらず。その微少を以てあえて報国尽忠を呼号す。或いは世の嗤笑を招かん。しかももとより招笑吾れ何ぞ関せん。故人がつむ一石の上にさらに吾人の一石を以てし、故人と吾人のつめる石上加うるに子孫の一石を積ましめよ。万々年のち必ず大山を目前に現じ得べからずとせんや。

吾人の力未だ以て甚だ強大ならず。しかも先人のなせし所にこれを加え、さらに限りなき子孫の限りなき力をこれに加えしめよ。始めて我が祖宗建国の大理想、我が祖宗世界統一の一大垂示を顕彰するに至らん。一玄洋社が国家に尽す所その値幾何なりやこれを知らずといえども、さらに万々の玄洋社を興し、以て国家に尽さしめば、その功けだし大なるべし。予の玄洋社史に筆を執るもの、只一玄洋社を伝えんがためのみにあらず、さらにこれに因って国民に尽忠報国を説き、玄洋社になろうて新たに万々の玄洋社を起さしめんためのみ。しかれども予もと非才浅学、加うるに文に甚だ拙なり。案に対して渋滞筆進まず、稿を起して稿また成らず、わずかにここに奮励勇を鼓し社史一巻を編了す。しかも上梓のちこれを翻読するに当たり、内容の不整、行文の稚幼渋晦、或いはかえって名誉ある玄洋社の歴史を傷つけ、或いは謹厳なる監修者の徳を汚すなきかを思い、心中忸怩たるもの

あり。

しかれども、筑紫健児が抱蔵する満腔の至誠と、玄洋社員が常に天下の憂に先だちて国家に尽したるの赤心に至りては、記して余すなきを世に示して密かに誇りとせんと欲す。

この書編纂大成に当たり、監修諸先輩並びに史料提供、修正改訂の示教を賜わりし諸先生の好意を謝し、併せて相沢小四郎、阿部暢太郎、池松節君の材料蒐集に対する労を感謝す。

大正六年三月

編修主任 菊池秋城識す

すめらみ国の武士は いかなる事をか勉むべき
唯身に持てる真心を 君と親とに尽すまで
(加藤徳成作筑前今様)

酒は吞め吞め吞むならば 日の本一のこの槍を
吞み取る程に吞むならば これぞ誠の黒田武士
(黒田藩武士歌今様)

SAMPLE
Shoshi-Shinsu.com

凡例

- 一、本書に記する所の氏名は記事の簡潔を計るため凡て敬語尊称を省略せり。
- 二、本書はただに玄洋社の記述のみに止めず、その関聯あるものにして時代思潮觀察の資料たるべきものは、努めてこれを蒐録掲記せり。これ玄洋社活動の因つて起る所以を知るに便宜多きを以てなり。
- 三、日韓關係は我が明治史上万般の事想と甚だ密接の關係を有するを以て努めて精細に記述せり。
- 四、本書中記述する所は多くの資料中最も正確なるものを参考とし、事實の正鵠を判断し能わざるものに就いては各説を対照掲記せり。なお疑いあるものに関しては當時の關係者にして今なお生存する人々に就きてこれを訊し努めて誤謬なからん事を期したり。
- 五、「玄洋社の面影」中に蒐録すべきものの、現に本書監修者たる野半介、大原義剛、美和作次郎氏および内田良平、浦上正孝、中島翔氏を始めその数すくなからざるも、いずれも目今社会にありて活動中なるを以てその行動成敗、直にこれを世に公にすべからざるものあり、故に記伝中に収むる所はその主なる人々のみにして社員の一部にすぎず。読者これを諒せよ。
- 六、本書編纂に際し材料蒐集未だ完からず、また關係者談話の講聴十分なりと云うを得ず、故に書中不備不足の点なからずとせず、版を重ねるに従つて訂正補綴せんと欲す。
- 七、本書編纂に当り多大の便宜と指導を与えられし先輩諸士の好意をここに感謝す。

大正六年陽春三月

玄洋社史編纂員識

五箇条の御誓文

- 一、広く會議を興し、万機公論に決すべし。
- 一、上下心を一にして、盛んに経綸を行ふべし。
- 一、官武一途庶民にいたるまで、おのおのその志を遂げ、人心をして倦まざらしめんことを要す。
- 一、旧來の陋習を破り、天地の公道に基づくべし。
- 一、智識を世界に求め、大いに皇基を振起すべし。

我が国未曾有の变革を為んとし、朕、躬を以て衆に先んじ天地神明に誓い、大いにこの国是を定め、万民保全の道を立てんとす。衆またこの旨趣に基き協心努力せよ。

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

第
一
篇

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

第1章 玄洋社

古えのいわゆる筑紫の国、乾^{いね}に海を控えうしろに山を背おう、海はすなわち日本海にして深碧一望韓海と連り勃海に波し、時に怒濤澎湃としていわゆる玄洋の壯觀を呈す。山はすなわち立花、鉾立、若杉、竈門、天拝、背振等、連巒疊峰、起伏円をなして神人瓠を浮べて波に騎すものの如く、その海、その山あい塞む所に平野あり、平野の中央那珂河の流れ潺々、水清冽その注ぐ所これ古の那の津にして今の博多海なり。海は立花山下に基せる海の中道^{なみち}の長堤によって外海と絶ち、あたかも弦月の状をなし滄波わずかに動く、十里の長松白砂に映じて、風韻雅趣深き所、すなわち福岡市を包む。

福岡市は今、博多と黒田氏の旧城下福岡町とを以て一冊を結びし所、博多湾に臨みて、海陸の便を控う。その西に佇む所の荒津山の麓、翠色煙波とあい映じ、煙波静かに渚に寄せて白鷗浮沈する西職人町の一角に巨然として蹲踞し、帳然として嘯き、弗然として叱吃し、冷然として白眼するものあり。これ何ぞや。すなわち玄洋社なり。その白眼して天の一方を睨むものは何の故か。その長嘯して動かざるものは何の故か。巨然、冷然たるもの又何の故か。我これを知らず、往いてこれを山靈^{かたらず}に問う。山靈不語、しかれども知る、一片憂国の赤誠発してここに至るにあらざるなきか。我これを知らず、去つて海神^{いわざ}に訊す。海神不云、しかれども知る、鬱勃たる愛国の至情凝つてここに至るにあらざるなきか。我これを知らず、さらに往いて巨人に問う。巨人また黙して口を不開^{ひらかず}、しかれども知る、昭々たる尊王の大義を奉じて、ここに至るにあらざるなきか。我これを知らず、さらに去つてこれを史乗に求む。史乗記せず、しかれども知る、民権の伸張を説いてここに至るにあらざるなきか。しかり山

霊これを不語^{かならず}、海神これを不云^{いわず}。巨人また黙し、史乗記せずと云えども、その慷慨するものこれ先憂後楽の士の常軌、玄洋社は憂国志士の団結なり、愛国志士の団結なり、尊王殉忠の団結なり、しかして民権伸長論者の団結なり、しかもまた軍国主義者の団結なり、一許千金を重んずるの義氣、豪邁天下を負うの意気、悲歌慷慨の血性、雜然打して一丸をなし、ここに玄洋社を生む。

惟うに光輝ある国史の回顧は、国民の元気を振作し国民の元氣振作は、さらに光輝ある国史を顕彰すべし。我が玄洋社の博多湾頭に生るる所以のもの実にその成るの日にあらずして、遠く筑紫健児が祖先より伝承の遺血はついにこれを成さしめたるものに非ざるなからんや。

そもそも筑紫の地は、往古より対外の関係はなだ密にして、その満韓に對する觀念は、祖先の血より血に、これを伝えるに伝う。彼の蒙古賊の襲來の如き、我が全国民の以て深く腦裏に印象する所なりといえども、殊に筑紫の民はその襲來を蒙りし地点なるを以て、さらに一層これを肝銘するものあり、その他幾多の対外的大事件にもっとも多く交渉關係を有する筑紫の民が、つとに対外的觀念の旺盛なりしは、もとよりしかる所ならずんばあらず。それ対外的觀念と云う、すなわちこれ愛国心の反映にあらずして何ぞ。掌を表すれば、すなわち愛国心なり。これを裏すれば、すなわち対外的觀念なり。故にその發露する所一として愛国の至誠に基かざるなし。

論者あり、玄洋社員来島恒喜、霞ヶ関に大隈を一撃す、その兇暴、君子の採らざる所と。しかり兇暴もとより非なり。兇暴以て國家の重臣を斃さんとするその動機の如何を論せずこれを排し又これを難ぜざるべからず。しかれども来島の心事を察するに条約改正に関する國論の沸騰を見て青春の血いたずらに湧き、その慷慨の余勢、ついに霞ヶ関の一撃となりしならんが、その浅慮憐むべく、その行難ずべしといえども、来島の拳は来島一個の決意にしてあえて玄洋社の預り知る所にあらず、また玄洋社の後援する所にあらず、来島の拳を以て直に玄洋社を難ぜんとするはもとより当らざるなり。

再び謂う、玄洋社は慷慨志士の団結、憂国志士の集団なり。まさに国家のために大いになさざるべからざるの機に会せば、もとより身命を鴻毛の軽きに比し、そのまさに殉ぜざるべからざるの時に際しては、猛猪奮進の状あり。彼のいわゆる玄洋社壮士なるものの行動に至っては、世評区々たりといえども、その主義と実行とはみな尊王愛国の至情に基づき、余勢遡ってやや常軌を逸したる者あるべしといえども、深くこれを咎むるの要あらんや。それしかり、己に^{ママ}しかり、玄洋社の志はもとより、内国の政策鬭撃に非ずして、清韓にあり。志を清韓に披^ハべんとするもの、その最も主たる所なり。しかるに内国事端多く、坐視するに忍びざるものあり、時に活動を内地に試みたる迄なり。

これを聞くかつて玄洋社養う所の壮士実に一千、領袖一度手を挙げれば、決死の志士立ちどころにその傘下に集まり、殺気天下を圧し、廟堂の大官肝胆ために塞^セく。人をして慄然たらしめ、威武屈すべからず、利禄誘うべからざるものありしと。かくの如くにして玄洋社は社会に重きをなし、かくの如くにして玄洋社は天下国家に尽さんとしたりき。しかもそれ豪邁奔放の意気かくの如きものを抱き、博多湾頭に立つて、西の方対岸大陸に思いを走らせし玄洋社員のその活躍、その進退、如何に我が明治史の一頁に活気あらしめたる事よ。しかもそれ悲歌慷慨の熱血を内に蔵して、玄洋社員がその得意の鉄腕を揮う時、如何に我が明治側面史に色彩を帯びしめたる事よ。乞うしばらく我にこれが記述を宥せ。玄洋社を説かんとする先ず、その郷土と対外的関係を説かざるべからず。

第2章 その郷土と外交関係

上古の対外関係

吾人民族の祖が、それ何の地より来たりて、この善美なる国土の固成修理に従い、ついに日本民族なる者を大成し得るに至りしや、もとより事史乗に超越し、茫漠々としてこれを尋ね難しといえども、その勇敢にして、武略に富み、つとに国威の発揚に努めたるを覗い得べく、その英図偉略の跡、赫々昭々、誠に国民の誇りとする所なり。史家の伝うる所、すでに素盞鳴命、その子五十猛神^{いそたけ}を帥いて新羅（根の国）を征し、神武天皇の御兄三毛入野命常世国（夜食国すなわち支那）に入り、稻永命は妣国に入る。妣は朝鮮の南にして新宸貴の祖は稻永命なりと。史家久米氏の考証する所によれば、稻永命は豊玉彦の外孫なれば、これ必ず海神国王の計いに出でたるなるべしと。史を按ずるに海神国は、すなわち筑紫沿海の地にして博多湾はその勢力中心地たり。これによりてかながうるも、我が筑前が、往古より清韓と特殊の関係を有したるを覗うべし。

地図を披いてこれを注視せよ。さらに史を繙きてこれを読め、実に我が筑前の地は、外大陸に対して攻守交通の要衝を扼し、内に対しては辺境征討の策源地なりしなり。崇神朝以降外朝の入貢するものこの地を経ざるなく、神功皇后ならびに欽明朝の征韓みな軍船をこの国に整させ給い、天智天皇の朝この地に水城を起し、烽を屯岐、対馬および筑紫に置き、外敵に備うるものあり。奈良朝に及び、隋唐三韓の通貢ようやく繁を加うるや、ここに大宰府、都督府を置き、また鎮西府を設け、津を開き、永く通交貿易の基を作す。延喜の聖帝醍醐天皇御即位の頃、泰平すでに久しく、文恬武熙、乾綱弛び、百制ようやく廃る。当時在廷の公卿縉紳、概ね歌舞管絃に日を送り、邦家の大事を忘れ、士民また浮華驕奢に奔りて、尚武の気ほとんど地を払い、天皇の撰修せしめられし延喜格式も、あたらしこの弊政を済うに効なく、満行の封事も、この頹風を革むること能わずして、日夜宸襟を悩まし給えり。時に、太宰少貳真材朝臣、職府政を管し、兼ねて管内大社の幣使に預かる。図らずも、延喜二十一年辛巳六月二十

一日、八幡大神の託宣あり、宣わく、「御殿を乾^{いぬい}に向けて、柱に栢^{かや}を用うべし。末代に至り、異国より我が国を窺う事あらば、吾その敵を防ぎ去るべし。故に敵国降伏の四字を書して、吾座の下に置くべし」と。朝臣直にこの旨を奏するや、叡感浅からず、これぞ正しく我が祖宗の宏謨^{こうも}にかないて、天下の弊政を刷新し、国家^{こくか}護の大事を遂げさせ給うべき神託にこそと、痛く畏こませ給いて、立ちどころに勅許を下し給えり。その官符に曰く、

託宣之旨、為^レ禦^レ来寇^一、加^レ之外賓通撰之境也、營^レ其宮殿^一宜^レ尽^レ美麗^二云々、
すなわちここに宮殿を宮崎の地に建設させ給う、莊麗至らざるなし、

依^レ醍醐天皇、紺紙に金泥を以て、敵国降伏の四字を宸書して、納め給えるもの、三十七葉あり。これ聖算の数に因りて染めさせ給う所宸翰闕損せず、今なお宮崎宮に存在す。その結構言語の及ぶ所に非ず。

ああ天皇は、かかる政綱不振、百度廢頽、しかも士道地を払い、民衆驕惰にして、邦家ほとんど暈卵の境に処し給いながら、日本第一の関門たる、筑前宮崎の地に、かくの如き破天荒の対外的雄図を断行あらせ給いて、以て対外的元気を振作あらせられたるなり。

今試みに宮崎宮伏敵門棲より第一第二の鳥居を通して、海面を眺望せよ。遙に志賀島の一端を掠めて、大洋に通ずる一線を画すれば、その極まる所は、朝鮮釜山なり。しかして古来我が国に対する外寇は、常に朝鮮を経ざるはなし。我が国の存立上、彼の地を以て我が主権の下に置かざるべからざるを思えば、この神託の決して偶然にあらざる、まさに驚歎措く能わざるものあり。すなわち、幾干^{いづく}ならずして、後一条天皇の寛仁三年三月二十七日、賊あり、刀伊兵船五十余艘を以て、突として対島に寇す。島守、わずかに逃れて太宰府に還り、賊は進んで翌月七日筑前に到り、掠奪をほしいままにし博多に迫る。太宰権帥藤原隆家前少監大蔵種材らをして警固所を守らしめ、討ちて賊をしりぞく。たまたま神風起り、刀伊わずかに外洋に逃れ、我が軍大いに勝つ。次いで文永、弘安年間国家の安危に係わる大事件は突発せり。大事件とは何ぞ、すなわち元寇これなり。

始め、元主フビライ高麗人趙彝の勧めにより、日本に修好せんと欲し、文永五年、高麗王元宗の臣潘阜をして太宰府に使いす。その牒状に曰く、

「大蒙古皇帝奉書日本国王。朕即位始、高麗君主来朝。義雖君臣、歛如父子。計王之君臣亦知之。高麗朕之東藩也。日本密邇高麗。開国以来亦時通中国。至於朕躬、而一乘之使無通和好。今特遣使持書布告朕志。冀自今以往通商結好、以相親睦。且聖人以四海為家。不相通好、豈一家之理哉。至用兵夫就所好。王其圖之。不宜、至元三年八月」

すなわち少貳覺恵太宰府に潘阜を引見し牒状を鎌倉に致しさらに朝廷に捧ぐ。朝廷その辞令礼を欠くを怒り、これに答えず。文永八年趙良弼再び来たり、通交を求むといえども、又これをしりぞく。ここにおいて文永十一年十月、兵三万を以て釣島を侵す。宗助国力戦、ついに死す。元兵さらに壱岐を侵す。平景隆また戦死す。元兵勝ちに乗じて、十月二十日博多を侵す。菊池、原田ら水城に退き防ぎ戦う。

たまたま颶風起り敵船覆没、夥しく元兵破れ還る。建治元年元使博多に来たる。鎌倉將軍これを鎌倉に招致し竜の口に斬り、さらに弘安二年元使周福、欒忠来たる。執権時宗これを博多に斬らしむ。ここにおいて元主弘安四年、阿刺罕を都督とし、元、高麗の兵十万を以て来たり我が国を攻む。五月二十一日壱岐を侵し、六月五日我が志賀の島を襲う。河野通有、大矢野種保、竹崎季長、少貳景資らを始め、菊池、赤星、原田、草野、松浦らの諸將防戦大いに努む。しかるに又再び颶風起りて、海波簸蕩、敵船数々覆没破壊し溺死算なく、敵軍完く伏敵門頭に塵滅し了んぬ。

貝原益軒の博多古叢記に曰く、

「昔、宋朝の末に、蒙古の国王北狄より起り、世を経て後、終に中華を攻め従えて、国号を大元と改む。これを元の世祖皇帝とす。我朝龜山院、文久八年に当れり。世祖位につきし初めより、度々日本に書翰を渡し、貢物を